

「豊かな書籍文化を紡ぐ都市—ドイツ・ライプツィヒを訪ねて」

大阪大学大学院法学研究科教授 的場 かおり

首都ベルリンからICEに乗り1時間10分ほどで到着するのが、ライプツィヒLeipzigである。約61万人が暮らすザクセン州最大の都市であり、ベルリンの壁崩壊のきっかけとなった「月曜デモ」の舞台としても知られる。ライプツィヒ中央駅に降り立てば、早速この都市の歴史が見えてくる。多数のホームと壮大な商業施設プロメナデンPromenadenを有する駅舎はヨーロッパ最大の床面積を誇るが、その完成は1915年であり、急増する都市人口に加え、「メッセMesse(見本市)」に押し寄せる訪問客に対応するためであった。

ヨーロッパの東西を結ぶヴィア・レギアVia Regiaと南北を結ぶヴィア・インペリイVia Imperiiとが交差するライプツィヒでメッセが開かれるようになったのは、12世紀のことである。度量衡の自由、関税・通行税の優遇、貨幣鑄造権、関税徴収権などが与えられ、メッセ期間中はツunftの廃止により自由な取引が認められた。こうしてライプツィヒは、西部のフランクフルト・アム・マインと双璧をなす商取引の拠点へと成長した。なかでも書籍・出版業は重要な役割を担い、17世紀には書籍メッセBuchmesse(ブックフェア)が開かれるようになった。ライプツィヒには書籍・出版業の発展を促す要素が揃っていた。それは、取引の場たるメッセ、需要と供給を支えるライプツィヒ大学、そしてザクセンの緩い検閲体制である。その結果、帝国書籍委員会が目光を光らせるフランクフルト・アム・マインや厳格な検閲を実施するオーストリア、プロイセンなどから仕事と人材がザクセンに流入し、1820年頃にはドイツで流通する書籍の3分の1がライプツィヒで印刷された。書籍・出版業の隆盛はまた、読書文化を育んだ。ライプツィヒは「啓蒙市民の中核」と称され、19世紀に入ると、初等教育の義務化に伴う非識字率の低下や貸出図書館の充実によってザクセンの読者層は拡大した。

しかし「冬の時代」もあった。1815年にドイツ同盟加盟国となったザクセンは、二大強国オーストリア、プロイセンが主導する出版物への弾圧政策の下、検閲の優等生国へと変貌していく。二段階にわたる事前検閲が導入され、内務省を頂点とする検閲行政体制が整備された。ルイーゼ・オットーLouise Otto(1819～95年／「全ドイツ女性協会」の創設で知られる女性運動家)は、詩集『あるドイツ娘の歌Lieder eines deutschen Mädchens』(1847年)にかかる検閲の様子を次のように回顧している。「(検閲官から返却された原稿では)およそ半ダースの詩が十字架(バツ印)上の死に捧げられていた」、「頁全体が赤いバツ印で抹殺され、下方に判決が下されていた、『不許可』と」、「本全体が血まみれの戦場だった」、と。1851年には、女性から編集権を奪う出版法が制定された。この法律は、ザクセンで『女性新聞』を発行していたルイーゼ・オットーを狙い撃ちにしたいといわれ、「オットー法」とも呼ばれた。そして東ドイツ時代、ライプツィヒの書籍・出版業は停滞を余儀なくされた。しかし書籍メッセは東欧の人々を書籍でつなぎ、また、西側の書籍に触れる貴重な機会を提供したことも事実である。

書籍や検閲の歴史に興味を湧いたら、「ドイツ書籍・文書博物館Deutsches Buch- und Schriftmuseum」がおススメである。1884年に「ドイツ書籍業博物館Deutsches Buchgewerbemuseum」の名で設立され、現在はドイツ国立図書館ライプツィヒ館の一部をなす博物館である。ここでは、書籍を含めたメディアの5000年にわたる歴史をじっくりと学ぶことができる。

「書籍の都市」としてのライプツィヒの歴史は、試練の時を乗り越え、今も紡がれ続けている。その活気と熱気は、毎年春に開催される書籍メッセを訪ねれば実感できる。今年は54ヶ国から2000を超える出展者が集まり、来場者は過去最多の31.3万人を数えた。マンガや古書の部門もあり、印刷や装丁など書籍に関わる様々な展示も人々の関心を引く。しかしこのメッセの最大の魅力といえばやはり、読者と出展者・クリエイターとの距離の近さである(この点で、「プロ」を主体とするフランクフルト・アム・マインの書籍メッセと差別化を図っている)。読者向けのイベントがあちこちで開催され、「オーディオブック」といった最新の読書スタイルもばっちり押さえている。

今も昔も、「書籍」を介して人々が集い、つながり、そして読む楽しさを発信し続けるライプツィヒ。その歴史を辿りながら、書籍の真価と未来に思いを巡らす秋の夜長というのもまた一興である。